様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３０１０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５９００４１

研究課題名（和文）太平洋戦争末期、沖縄・那覇沖の小島で秘密裏に行われた日米和平交渉の歴史的意義

研究課題名（英文）a research about historical significance of the peace talks in a small island of Okinwa during the Pacific War

研究代表者
阪井　宏（Sakai, Hiroshi）

北星学園大学・文学部・教授

研究者番号：００６１０７４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　太平洋戦争末期の1945年６月末、沖縄県・那覇沖にある慶良間諸島の阿嘉島で、米陸軍小隊と、同島に孤立した日本軍守備隊が、２日間にわたって降伏交渉を行った。交渉の過程で日米兵士は、島の浜辺で共に昼食をとり、戦後の世界の平和を共に祈り合うという極めて珍しい交流を行った。
　本研究では米国在住の元米軍兵士の子息らに会い、インタビューを行ったほか、米公文書館で関連史料を手に入れた。これらをもとに17分のドキュメンタリー映像を制作。作品は国内映像祭で優秀賞を受賞した。また同交渉の日系人通訳の出身地であるハワイ州カウアイ島を訪れ、コミュニティーカレッジで上映。本交渉の意義について学生や市民らと議論した。

研究成果の概要（英文）：During the battle of Okinawa in July 1945, an American colonel made contact with a Japanese officer at a small island in Okinawa. The two commanders and their subordinates met at the beach and discussed the possibility of surrender for two days. Although they could not agree to a surrender, nearly 100 Japanese and American soldiers ate American boxed meals together at lunchtime. Finally,the Japanse armies and Americans knelt down side by side to prey each Gods for a peace world in the future. This is an astonishing story but no records exist in Japan.In the research, I studied the background of the history, then made a short documentary film about it. Also, I visited the Community College in Kauai island in Hawaii, which is the home island of one of the interpreters of the negotiation. I spoke on the history and showed the film for the college students and the islanders. Then we discussed the lessons we could learn from the history.

研究分野：ジャーナリズム倫理

キーワード：沖縄戦　慶良間諸島　阿嘉島　交渉

１．研究開始当初の背景

（１）本研究でテーマとした史実は、国内では公式文書が残っておらず、わずかに元日本兵守備隊兵士が書き残した手記や、作家によるルポルタージュがあるだけだった。海外の史料を引用する文書もいくつかあったが、出典の表記がないなど、資料価値の乏しいものが大半だった。

（２）ただ、米国内では作戦に加わった元米兵の子息が大量の史料を保管しているほか、米公文書館（メリーランド州カレッジパーク）には軍の作戦文書が残されていることが分かった。特に交渉の米側代表の G．J． クラーク中佐の遺族宅（ジョージア州アトランタ）には、この米軍公式報告書を作成した際のメモ類、写真、地図等が大量に保管されているとのことだった。

２．研究の目的

本研究は、国内ではほとんど知られていない本史実の全容を、収集資料とインタビューによって明らかにするとともに、その歴史的価値を調べ、将来を担う日米両国の若者たちに本交渉の意義を伝えることを目的とした。

３．研究の方法

（１）初年度は米国アトランタのクラーク中佐の遺族宅で大量の史料を収集し分析した。また、米公文書館で軍の公式文書を閲覧し、作戦の背景や軍内部での評価などを研究した。

（２）最終年度は初年度の研究結果をもとに、沖縄へ入り、ドキュメンタリー映像を撮った。映像作品を制作することにしたのは、出来るだけ多くの人たちに本史実を伝えるには映像の形で残すのが最良であるとの判断からである。映像制作には、ドキュメンタリーを多数手がけた経験のある４人の研究協力者（いずれも北星学園大学学生）に参加してもらった。

４．研究成果

（１）制作した作品は、第 34 回「地方の時代」映像祭 2014（大阪府）に出品。作品は高い評価を受け、学生部門最高位の優秀賞を受賞した。また同祭会場では、本作品が上映され、学生、社会人、テレビ局関係者ら多くの参加者が鑑賞した。さらに東京ビデオフェスティバル 2015 でも佳作に選ばれ、大林宣彦氏ら審査委員から物議をかもす作品として高く評価された。

（２）映像作品は、本交渉の日本語通訳官の１人、故ロバート・オダ氏の故郷であるハワイ州カウアイ島のコミュニティーカレッジでも上映した。会場には同カレッジの学生や研究者のほか、同島で暮らす日系人らも多数詰めかけ、先人が行った交渉の評価について論議した。

（３）以下、本研究によって明らかになった本史実の背景や評価について、簡単にまとめたい。

ｉ）史実の概要

●米軍の慶良間上陸

同島は 1945 年３月 26 日、米軍が最初に上陸した地である。いわば沖縄戦はこの島への上陸作戦から始まったといえる。

同島のほかにも慶良間諸島には多くの島がある。米軍は同島上陸のあと、他の島へも次々と上陸作戦を行った。これは慶良間の島々に囲まれた海域を、沖縄本島上陸の際の給基地にするためである。

日本軍からの攻撃で破損した艦船を修理する海上基地としては、慶良間の海は最良の条件を備えていた。那覇まで約 50 キロの距離で

あり、島々に囲まれた海は水深が深いのに穏やかである。ここであれば大型空母や戦艦も楽に停泊することができる。

慶良間諸島の島々の守備隊は、沖縄本島が攻撃される事態に備えての部隊だった。ベニヤ板製の小型モーターボートの前部に大量の爆薬を収め、米艦船の背後から特攻することが主任務だった。いわば海の特攻隊である。しかしそのような情報は上陸作戦前から米側に伝わっており、ボートは上陸の際に米軍にことごとく破壊された。守備隊兵士はボート以外に強力な武器を所持しておらず、山奥に逃げ込むしかなかった。

●守備隊の孤立

上陸作戦を敢行した米軍は３月以降、慶良間の各島を制圧することはしなかった。その理由は、①島に立てこもった守備隊は組織的に反撃するだけの銃火器を持っていない②島の奥は密林であり、制圧作戦を行えば米軍側にも多くの犠牲者が出る③内海を補給基地として使えるのだから、無理をする必要はないーといった判断があったと見られる。

それぞれの島によって状況は異なるが、阿嘉島については 200 人の日本兵、500 人の島民、100 人の朝鮮人が島中央付近の密林に立てこもった。食糧はすぐに底をつき、飢えに苦しみながらの持久戦となったのである。

●全島降伏作戦

６月に入り、沖縄本島の組織的抵抗が続き、日米両軍と島民の間に多くの犠牲者が出る中、第 10 軍情報部幹部のクラーク中佐は、言語将校を集め、日本軍の抵抗をやめさせる妙案を募った。これに応じたのが日本語通訳官のオズボーン、スチュワード両中尉だった。２人の発案は、阿嘉島を島ごと降伏させ、それを足がかりに本島の降伏につなげるというアイデアだった。クラーク中佐はこれを採用し、両通訳官にハワイの日系二世オダ軍曹を加え、通訳３人にわずかな護衛兵という少人数部隊を編成し、作戦を行うことにした。

●交渉

さまざまな困難を経て実現した交渉には、日本側が野田隊長、竹田副官ら数人、米軍側はクラーク中佐と３人の通訳官ら 10 人ほどが当たった。米側には梅澤ら、日本人捕虜２、３人も加わった。

交渉の位置づけは日米双方で異なっていた。米軍側はあくまで降伏交渉という位置づけで、降伏の条件を用意していた。一方の日本軍守備隊は情報から３カ月間遮断されてきたため、とりあえず話を聞いて判断するという方針で臨んだ。梅澤という友人の口から直接、今の戦況について聞きたいというのが、野田隊長の本音だったとみられる。

交渉の中で、梅澤は野田に降伏を勧めている。しかし徹底抗戦を命じてきた野田にとって、降伏の決定を下すのは容易ではない。そんな中で昼を迎えた。

クラークは野田に昼食を提案、小型の船舶内に食事を用意しているので、一緒に食べようと提案する。こうして日米両軍兵士約 100 人が、浜辺で昼食を共にすることになった。

翌日、野田は、自らは海岸に下りず、副官の竹田を送る。竹田はクラークらに、①天皇の命令がなければ降伏はできない②米軍が軍事行動をとらない限り、日本軍は島周辺の米兵を攻撃しない、といった趣旨の決定を伝えた。クラークは残念がりつつもこれを了承。会談の終わりにクラークは「双方が信仰する

神に、（これからの）国際理解と平和を祈らないか」と提案した。竹田はこれを受け入れ、護衛や他の兵士も呼び集めた。日米の兵士10数人は浜辺に輪をつくり、従軍牧師の祈りの言葉に合わせてこうべを垂れた。祈りは通訳官が日本語に翻訳した。

ii）交渉の背景

●クラークの存在

本交渉が実現した背景には、クラークの存在が決定的に大きい。本作戦は第10軍司令官、サイモン・バックナー中将が1945年5月下旬、情報部長のL・B・エリー大佐に、日本軍に対して心理作戦を強化し、併せて日本軍の牛島准将に名誉ある降伏を促すための方策を考えるよう指示したことから始まっている。この作戦を割り当てられたのがクラークだった。

クラークは米国・ジョージア州の信仰心の篤い家庭に生まれた。技術に明るい理系人間だった。戦後は戦前から勤めていたジェネラル・エレクトリック社の幹部となり、64年に退社。1987年、死去した。

●梅澤の協力

本交渉の過程では、梅澤の存在も大きかった。

梅澤は複雑な人生を歩んだ。軍人の祖父、父の背中を見ながら育った。兵隊思いの上官として、部下の信望は篤かった。

実は、梅澤は「岩波・大江健三郎訴訟」の原告の1人である。大江が書いた「沖縄ノート」（岩波新書）の中で梅澤は、座間味島で住民に集団自決を命じた張本人として厳しく批判されている。しかし梅澤は「自決を命じてはいない」と主張。名誉を傷つけられたとして、著者の大江と出版社の岩波書店を訴えた（のちに最高裁で敗訴）。梅澤は2014年、死去した。

●阿嘉島の状況

慶良間諸島の島々では、多くの島民が集団自決によって命を落としている。その中で、阿嘉島では1件の自決も起きていない。しかし野田が優れた判断を下したのかというと、そうでもなさそうである。むしろ、幸運が重なったとみるのが自然だ。兵隊の集結した山林と、住民が避難した一画は極めて近接していた。したがって、軍と住民の意思の疎通が比較的容易であったことが、自決が起きなかった一番の要因ではないか、という声が島民や元兵士の間にはある。

●通訳官の存在

オズボーン、スチュワード両通訳官は米コロンビア大学で共に特訓を受け、短期間で日本語をマスターしている。同期には日本文学者のドナルド・キーンがいる。

オズボーンは戦後、外交官となり、日米の架け橋となった。札幌の領事も務めている。日本の各界に多くの友人をもち、よき理解者の1人だった。

スチュワードは本交渉当時、両親が中国大陸で日本軍に幽閉されていた。そのような背景の中でありながら、冷静に交渉にあたった。

オダはハワイ出身の日系二世である。他の日系二世と同様、米国への忠誠心を証明するために、戦場に赴いた。一方で、妻の肉親2人は広島で被爆し、亡くなってもいる。

iii）評価の現状

●日本

国内での評価は、これまでほとんどされて

いない。一番の理由は史料が残っていないためである。

日本の軍隊では、戦闘中に敵側と交渉することなど論外である。軍法会議にかけられれば、処刑されてもおかしくない。そんな恥ずべき行為について、もちろん当事者は多くを語らない。同島で命を落とした肉親から、厳しい非難の声を浴びかねない。野田も戦後、そのような遺族から罵声や批判を浴び、身を隠すように生きた。そんな位置づけの史実は当然、史料にも残らない。

●米国

実は米国でも、この史実はほとんど評価されていない。１万数千人もの米軍兵士が命を落とした沖縄戦の中にあって、２日間もかけて交渉した末、結果的にほとんど無抵抗の小島を降伏させられなかった、という意味で失敗作戦という位置づけのようである。

また、敵兵に食事をふるまったという行為が果たして許されるのか、という声も考えられると、クラーク自身、手記の中で振り返っている。確かに米軍の軍規の中には、捕虜でもない敵に食事を与えることは利敵行為に当たるという趣旨の一項目はある。

iv）再評価の可能性

本研究では、戦時中に沖縄・那覇沖の小島で行われた日米交渉の史実を調べ、その意義を検証してきた。今回の研究によって史実の全容はほぼ明らかになった。しかし今後、本交渉が日米双方で再評価されるかどうかは不透明だ。

ただ、本研究で接触した阿嘉島の関係者、米国の元兵士の子息らは、この島で行われた交渉を大切な記憶として受け止めている。さまざまな貴重な史料がそれぞれの元で保管されていることも分かった。将来、何らかの形で、本交渉を記念する資料館、モニュメントを同島につくる動き等があれば、彼らは間違いなく惜しまず協力してくれるだろう。

戦時中に銃を置き、平和を願う祈りを捧げたという歴史は、負の歴史である沖縄戦の中で、誇りをもって語り継ぐことのできる数少ない史実の１つである。戦争終結から 70 年。兵士が銃を置くという行為の正当性の評価も含め、この史実を後世に残すことは、我々戦後世代の大切な使命であるとえいよう。

５．主な発表論文等

ドキュメンタリー映像作品「銃を置いた兵士たち～消えて行く沖縄戦秘話」（17 分）

６．研究組織

（１）研究代表者

阪井　宏（SAKAI Hiroshi）

北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科教授

研究番号：25590041

（２）研究協力者

川本　康博（KAWAMOTO Yasuhiro）

澤田　紗季（SAWADA Saki）

友善　　豪（TOMOYOSHI Go）

小野寺　悠(ONODERA Haruka)